

55. 浸水・ドタの排水工事

大雨での浸水、その悪水のはけ先をめぐって堤の両側の対立はさけられなかったが、戦時中から戦後を通じての河川改修と排水工事で、徐々に改善されてきた。

大正6年の大塚切れ

それまで2年に1遍は水害があった。大正6年(1917)には船が通れるほど浸かった。空き地に離れがあったので疎開した。「井高野の辺も百姓ばかりですわな、牛や納屋がワーンと流れてきよりました」。10月頃で、親戚から人足連れてきて、稲を青いながら刈り取った。

このとき古い過去帳を流してしもて、それからは水害やというたら第一にお仏壇を避難せました。別府ではお宮さんが一番高い。うちは離れが高かったので避難したけど、皆はお宮さんに避難してテント張ったりして集団生活。五右衛門風呂でした(別府)。

土手をはさんでにらみ合い

昭和29年(1954)檜尾川が切れて鳥飼に浸水、鳥飼和道から鳥飼八防までの土手道が水をかかえた。土手道を切ると鳥飼側は助かるが味生(一津屋)の田が浸水する。そこで鍬・鎌・鉄砲まで持ち出して双方がにらみあった(鳥飼中)。

洪水の時、水のはけない鳥飼の村が新在家の堤防を切ろうとして別府と対立した。その時のどこそこのおっさんが鉄砲を空に向けてバーンと撃ったこともあった。

青年団の頃、小学校前の堤防を2人で切りに行ったことがあった。粘土の所を2尺(60cm)ばかり切った。話を聞いた若いもんが調子に乗って砂地の所を切ったら、水勢ではじきとばされそうになって口が大きく開いてしまった。切るなら粘土の所。昔の人のいうことは正しい(別府)。

ドタの排水工事

東別府の近鉄車庫の辺りは、戦時中に食料増産のため学徒動員で田の改良工事が行われた。米屋からも勤労奉仕に出た。田の中に排水溝を切って木の枝を横たえて埋めた。これで二毛作が可能となった。二毛作にすると麦は5俵とれたが、米は10俵とれたところが6俵しかとれなかった。粘土質で鍬が引けず往生した。別府の旧神崎川跡は砂地では麦は7~8俵とれていた(別府)。

排水工事で固くなる

中央環状線沿いは牛の腹の擦るドタで小作の人も返しにきた。数年ほっとくとヨシが生えて根を取るのに苦労したが水が落とせるようになって土も年々固まってきた(別府)。

56. 大阪へ肥汲みに

江戸時代から、大都市大阪の出す糞尿は、近郊の農村の肥料として利用されていた。摂津市域では、大阪への肥（こえ）汲みは戦後まで続いていた。

宣教師も驚いた京の清潔

戦国時代、ポルトガル人宣教師が京の町を見て、日本の都市の清潔さに驚いたという。大都市の人糞を近郊農村の肥料に還元するリサイクルシステムが、16世紀にはもう出来上がっていた。このシステムがいつまでさかのぼれるか、これは汲み取り式トイレの成立とも関わり、いま考古学、都市研究のホットな話題となっている。

「天下の台所」の汲取りめぐって訴訟も

「天下の台所」といわれた大坂。この30～40万都市の排出する糞尿は土地の集約的利用をする農村には貴重な肥料。江戸時代中期には町方に下肥の仲買組織があって、百姓は仲買から肥を買った。百姓らは摂河三一四ヵ村の組織を作って訴訟し仲買を廃止させた。

肥船を引いて上る

親の世代？、船で人糞を買いにいった。毛馬（けま）の辺りで肥を1船買って、自分の船に積み替えて5人で引いて上ってきた。

親方がカイ（櫂）挿して舵取りをし、雇人（やといど）が引いて上った。親方は麦ご飯、雇人には白いにぎり飯。これには雇人も感激してよく働いてくれた（別府）

帰りは蒸気に引かせて

肥船を何隻かもって大阪へいく商売があった。行きは流れにのって下り、天六や長柄の辺りで汲んだ。受持ち区域が決まっていたのであろう。こちらで捌けなくても汲みに行った。帰りは蒸気船に引かれて鳥飼のカワシマという砂州に着く。船が着くと百姓らはタンゴとオウコでいのて（担って）自分の田のノツボ（野壺）に入れた（鳥飼上）

馬力で汲みに行く

戦前は仲間で牛を飼っていたが、終戦後は牛を1頭飼って馬力で大阪の天六、本庄まで下肥をくみ取りにいった。田に貯尿槽をおいて溜めておき、使っていった（鳥飼上）

牛のひく馬力に肥桶を10個ほど積んで出掛けた。醤油樽の底を抜いて逆さにし、ふたを作って肥桶とした。醤油樽は逆さにすると下が広がって安定がいい。

昔は淀川の堤防が道路で鳥飼大橋もなかった。長柄橋まで一気に下って渡り、その周辺で汲んだ。汲む地域はだいたい決まっていた。むこうにも人がいて今日はどこそこと言われ、適当な所に馬力を止めて自分で汲んだ。お金は払わなかった（鳥飼上）